福岡
地域福祉活動職員の
まなこ
社協活動前進のために
No.41　1997年2月発行　福岡県地域福祉活動職員連絡会　まなこ編集委員会　印刷　コロニー印刷

全国社協職員のつどいレポート
～若さは夢・現の可能性～

甘木市社協　前田　正剛

どういう訳か、なぜ私なのかよく解らないまま県社協の近ちゃん（地域課の近藤君）より電話で連絡があり、二年ぶりに復帰した「福岡県地域福祉活動職員連絡会」（昨年十二月に「福岡県専門員連絡会」から改組したばかりである…）の鉄砲玉として私と築城町社協の「真さん」こと佐々木君そして筑後ブロック職員連絡会の若頭である長野君と、関西社協コミュニティーワーカー協会（関西コミ）が率いる「第四回全国社協職員のつどい」の状況偵察に、福岡県地職連カラ出張した。

このつどいに参加することを市社協事務局内でも了承を得ていたが、年末・年始の忘年会、新年会で忙しい中、前泊の宿泊場所探しや新幹線の乗車時間と予約、そして九州の片田舎からせっかく関西の中心地である大阪に行くので、「食い道楽」と「おいしい情報（地域福祉関係）」を調べ、調整する事が面倒くさい私は、どうしようかなと思案していた…。

ところが、築城町社協の真さんは、この福岡県地職連カラ出張の依頼があってすぐに、遠路大阪に行く機会を得たので「全国社協職員のつどい」の開催時間の前に、全国でも先進的な活動を実践している「大阪ボランティア協会」と「おおさか行動する障害者応援センター」を覗いてみようと、研修調整してくれ資料を山のように送って来るし、「大阪ボラ協」に地の利の良く、安価の宿泊先を出して来た。

更に新幹線と在来線との時間調整も含めた乗車計画・経費まで計算してくれるし、いたれりつくせりの「役員なみ…」の福岡県地職連カラ出張の始まりとなった（真さんは、旅行大好きらしく、旅行計画や行動日程作りが楽しいらしい。県内の市町村社協のスタッフは個性や特徴がいろいろ…その人の持つ個性や特技を、もっと仕事に生かせることが重要だと感じる）。

真さんの調整により小倉駅で合流した私たち三人は、ビールとバーボンを片手に本拠地「関西コミ」に何を上納するか、そして「全国社協職員のつどい」前の「おいしい情報」収集をどのようにするか協議をしながら一路大阪めざした。

夜の街「おおさか」めぐり

大阪の前泊ホテルに入り、「食い道楽」はどこや…？大阪名物食い物は…？、机上での情報収集と違い、土地鑑の無い私たちは、ホテル近くの商店街を何度も行き来しながら、今宵の餌とアルコールを求めてフラフラとさまよった。

さすが若手のホープ長野君は県南ブロックの使命を受けているので、精力的に夜の街「おおさか」の地域情報を収集すべく、サンドイッチマンのおじさんや、その筋のおネエさんやおニイさんから、何か意味ありげの割引券やチラシを復命書の添付資料として使用するのであろう、多数収集するのであった。

大阪ボラ協・障害者応援センター

「大阪ボランティア協会」と「おおさか障害者応援センター」の活動実践報告や、組織の詳細レポートについては、この「まなこ」の紙面に「真さん」が書くとして、私が「応援センター」を知ったのは、社協に入って間もない十四～五年位前だった。まだまだ県内で重度障害者の自立生活が少ない中で、障害者自立運動を目指していた、現在「きづなの家」事務局の立石昭彦さんと、二十四時間、三百六十五日の介護保障の実現が厳しい状況だった当時、個人のレベルでなく、組織的にしかも専従職員体制で行っている「応援センター」の活動を聞いて、大阪の凄さに驚きを感じ、介護手配の方法・人的調整についていつかは、訪問し自分の目と耳で確かめてみたいと思っていた。

低所得高齢者福祉中心に組み立てられたホームヘルパーの訪問派遣対象が規制暖和され…?、いや、在宅福祉サービスが必要な住民に、安心して地域で普通の暮らしが実現できるように在宅福祉サービスの充実が図られ、さらに受益者負担（サービスの一部有料化を含む）によるホームヘルパー等の在宅福祉サービスの充実化により、派遣に対し難色をしめしていた障害者や寝たきり・痴呆性高齢者等へのサービス供給も加速度的に対応できるようになってきた。

今回訪問の機会を得た私は「応援センター」が持つ介護者派遣事業の位置づけが気になっていた。

案の定、時も流れ基本的に無料（活動費は無料、交通費の実費保障は利用者負担でなく応援センターの会費より支出）の「応援センター」の介護者と公的サービスであるホームヘルパー事業との整合性の問題。

そして、「応援センター」が派遣する介護者の中でも、利用会員が特に気の合う介護者の専有化の問題。

一部有料の公的ホームヘルパーとの活動領域の線引きを含めた公的保障の問題等々、本来の「応援センター」の持つ障害者解放運動の理念の部分と実状とのギャップなど。

様々な問題を抱え、専従スタッフの中村さんの苦悩と、課題は図り知れないものであった。

さらに追い打ちをかけるが如く、阪神大震災による介護問題との支援組織の在り方が、今後の「応援センター」が本質をどう展開するか大きな転換期を迎えている様であった。

解説1…大阪市の公的ホームヘルパー制度は公共団体および外郭団体（社協を含む）に専従スタッフを一部配置し、サービス供給量の不足分は金銭給付を行い、当事者自己調整制度を行っているらしい。

お客さんには損はさせません

一方「大阪ボラ協」の実践は、社協の法人化の歴史と変わらず約三十年前に設立され、活動に裏付けられた成果は、私たち後進社協の入り込む余地は無かった。

ボランティア育成講座は無料の発想の、田舎社協マンからすると、受講者が受講料を負担し活動協力するというスタイルを完成しているのにはビックリ！

大阪らしく、「銭をもらっている以上受講料以上の満足感とお土産を持って帰って頂く」という感覚は、公費や共同募金、寄付金等、安定資金を活用している私たち社協マンの大きな課題と感じた。

BUT、低賃金で労働を提供している「大阪ボラ協」と「応援センター」の職員の皆さんに、福岡県地域福祉活動職員連絡会より、今後良い労働賃金体制が確立できるようエールを送ります。詳しい実践内容は「真さん」が…。

関西コミ協と福岡県地域福祉職員連絡会との関わり

昨年末の県地職連（福岡県地域福祉活動職員連絡会）の研修会に「関西コミ」から松永さんと高橋さんのお二人に、関西での取り組みについて、ご報告いただき、社協職員としての資質向上と、我々社協職員（地域担当だけでなく）が住民主体に事業展開が出来ているか、また自己点検は…を突きつけられた。（6頁～8頁詳細掲載）

「関西コミ」の実践を、共有する事と、今後の福岡県社協の組織内組織である「福岡県地域福祉活動職員連絡会」の活動指針を模索すべく「第四回全国社協職員のつどい」に本年は私たち三名が参加した。

若さバリバリのつどいスタッフ

「第四回全国社協職員のつどい」が始まり、出てくるスタッフの若さピチピチ…、何か違う。

北は北海道、南は九州熊本県の全国から二十三都道府県、約二百名が参集し、お決まりの堅苦しい開会行事が始まると思いきや、お偉いさんの挨拶もなく、円卓方式のグループ形態の開会、進行役の大阪泉佐野市社協の中谷敦子さんと京都府社協の渡辺一真さんの軽快な関西弁での「ボケと突っ込み」によるオープニング、私たちは「吉本新喜劇」に来たのか、「テレビのバラエティー番組の公開収録会場」に来たのか？もしかして「全国社協職員のつどい」に来たのか？？混同した。

軽快なおしゃべりの中、私たちが参加しているこのグループは、参加申し込みの段階で「何らかの関係性」で、グルーピングしているとの事で、「その関係性」は何か…？

グループ参加者で協議を行い、秘められた問題把握の調査とその傾向、解決のための回答は…の実践をさせられるはめに…。

いざ、本番の分科会に突入

分科会の設定は9分科会、

① どう描く!?5年後の肖像画「今」、

心の透き間を照らしたい

若さは夢・現の可能性「(いまだ心は)二〇代の集い」

② 極めれば社協流

社協の直接サービス

③ 私たちご近所福祉に命かけてます！

小地域ネットワークは社協を救えるのか

④ 社協のあり方を「根っこ」から考える

事業型社協から見えたもの

⑤ 「社協って何しているの？」じゃアカン！

住民から見た社協を考える

⑥ 元気がほしい！みがき合える仲間

育ちあいの職場づくりのために

⑦ 変わらなきゃ！「社協・解体新書」あなたも前野良沢、杉田玄白、それとも…

法人運営・社協づくり

⑧ 社協マンの情報料理教室

タケコプターからどこでもドアーへ

⑨ 公的介護保険・いま社協職員が問われているもの

以上の盛りだくさんでユニークな分科会なので、あれもこれも覗いてみたい、聞いてみたい欲求にかられたが、体は一つ、「分身の術」は使えなかった。

分科会報告つまみ食い

筑後市の長野君から、第六分科会の報告…それぞれの職場で、福祉が語り合える環境にあるのか？また、「ヤリガイ」を感じることができる職場であるか？そんなことを中心に意見を出し合いました。予定されていた「KJ法」での討論は中止になりましたが、いろんな思いを熱く語れて、本当に満足できる分科会でした。

『悩みを抱えているのは、オレだけじゃないんだ。カベにぶつかっているのも、オレだけじゃないんだ。』というふうに、元気を出すことができたと同時に、関西の「わかものパワー」にも、大きな刺激を受けました。

タケコプターからどこでもドアーへ

築城町の真さんから、第八分科会の報告…三つのグループ（六～七人）に分かれ住民はどんな情報を欲しがっているのか、（必要としているのか）について各自より意見や問題提起、その後、

・社協情報調査
・プレゼンテーション
・インターネット
・ページレイアウト作成
・ページメーカー

という制作希望メディアを選択させられ時間の関係上ほんのさわりの部分でしか触れられなかった。

「情報」この言葉を聞いて、今はやりの「インターネット」や「ホームページ」の言葉がやはり出てきてパソコンによる情報収集・発信が二一世紀の主役になるのは間違いないと思う。

しかし、社協で飯を食っている「私」たちにとってどこで（住民の住んでいるその地域で）だれに対しての情報なのかをもう一度問い直してみなければならないのではないかな、と感じた。

パソコンも数ある情報収集・発信の一つであるということがわかった。

ただ、この分科会の課題設定、企画力、資料作りに尽力されたスタッフの熱意には、頭が下がる。

そろそろ、本場名物食い道楽（おはなしの部）へ

私は、第五分科会の**住民から見た社協を考える**

この分科会の参加者は一六名、さらに四つのグループに分かれ事例報告の後それぞれ、設定された討議の柱に添って議論するスタイルを、司会者より提起された。

事例報告では、社協と親しくお付き合いのある、「校区福祉委員会（校区社協）の委員さん」と社協自体の存在をほとんど知らない「精神障害者の方々とお弁当屋さんを運営してあるスタッフ」そして社協と業務的なお付き合いのある「保健所の保健婦さん」よりそれぞれの立場から見た社協像を伺った。

住民から社協がどう見えるかというよりも、社協マンが住民とどう関わっているのかが問われており、社協で飯を食っている我々の姿勢が問題と感じた。

特に私の心を揺らしたのは、福祉委員の吉田さんの提起で、昭和五〇年に自治会が、五三年には校区福祉委員会が結成され、校区の福祉活動を積み重ねて来ているのに、最近校区内で行った「保健福祉関係の住民認識調査」（正式な名称では有りません…私がこのレポートのために付けました）では、保健所八〇・六％、福祉事務所四一・六％、民協三二・五％そして栄えある社協は、なんと二〇・七％の知名度しか無いとのことであった。

吉田さんは民生委員でもあり、社協との関係の深い方であるが、今まで出会ってきた社協マンを通じて感じたことは、社協マンは「事務屋でなく人として接して欲しい」、「ドクターのように相談者に対し診察を行い、より良い処方箋を出して欲しい」、「地域で活動している私たちとお互いに人間的に成長し合う関係でありたい（多忙なのはよく解っているが…）」、社協マンが一緒にいると企画の運営や、問題解決も安心して対応できる」と…。

もう一度初心に帰って明日からの仕事を始めるぞと元気の出た分科会であった。

感じたことアレコレ

①、中心スタッフが「若い、若い！」…この規模の集会を福岡で開催するとしたら、社協歴二〇年クラスの大御所を実行委員会のメインスタッフにして

行うと思うが、ここ大阪の実行委員会は、社協歴二～五年の二〇代の構成となっており、しかも職種も色々…福岡の若手よ！大阪に習い我らおじさんを引き回しておくれ。

②、名刺交換をしながら、ハタと感じたのは、「福祉活動専門員」とか「地域福祉活動コーディネーター」みたいな名称が見あたらない。なぜかと聞いてみると、それは国庫補助金事業名でしょう…。

確かにそうだ、我々に重要なのは、給与に対応する給料表を渡るためには職務分類が必要である。もう一度我が社協の職務規程をはじめ規約を確認してみよう。意外な落とし穴があるかも。

とにかく、様々なことを考えさせられたこの「つどい」…次回は是非、若手の君たちが参加してみたら…。

大阪見聞録
〈おまけ…〉

築城町社協　佐々木真司

第4回全国社協職員のつどいが大阪で開かれるということで、せっかく大阪まで足を運ぶならば、手ぶらで帰るのはもったいない、と、県内から参加した2人と相談して社協職員のつどいが開催される当日、ほんの2時間程度だが「大阪ボランティア協会」と「おおさか行動する障害者応援センター」を訪れた。

「応援センター」代表の牧口さんに、万一、もう一度お会いできるかなと淡い期待を抱いていたが、やはり…おられなかった。

事務局は、専従職員3名（そのうち障害をもった方は1名）、パート4名（同3名）の計7名。

当日は、職員の中村さんに応対していただいた。18年前「だれでも乗れる地下鉄に」、ということでエレベーターの設置運動がやがて「応援センター」へと発展していったそうだ。

「応援センター」は、ボランティア活動的性格と、障害者運動的性格をもちあわせ活動と運動を展開している。

「街に出よう」と、外に出ることによって刺激を求めたり、社会には様々な問題があることを行政や住民に知ってもらおうと今後も外出にもっと力をいれていきたいと語られた。

悩みは、「ひとを集めること」と「金を集めること」だそうだが、どこかの団体と同じような……。

「応援センター」以外にも、障害者を支援する団体（有料）が五つあり、ボランティアで支えるには、限界に来ていることと、有料化の波に押され、活動の境が見えにくくなってきているなど様々な課題を抱えて大変苦慮しているといわれた。

中村さんは、学校の講師をしながらボランティアとして「応援センター」に関わっていたが、その現実を目の当たりにして講師を辞め、専従職員として働いていると…そんな中村さんにエールを送りたい。

予定の時間をオーバーして、寸時の時間も惜しむように私たちは、「大阪ボランティア協会」へ伺った。しかし移動に時間はかからなかった。なんと「大阪V協会」は、「応援センター」の隣のフロアに事務所があった。

コーディネーターの福満さんが笑顔で歓待してくれた。

「大阪V協会」のことは、事前に資料をいただいて予習をしていたつもりだったが、資料を見るのと聞くとでは、大違い。その活動内容、バラエティに富んだ企画、研修、講座の豊富さに圧倒され、私たちは絶句した。

無料か僅かな受講料で各種講座を行っている社協からすると受講料を負担している以上、受講料以上の『もの』は、絶対に満足して帰っていただくようにしているし、私たちもそのつもりで仕事に取り組んでいると、自信をもって語られた。

30年という長い年月に培われた活動と実践。歴史が刻みこまれた「社会福祉法人大阪V協会」の凄さを肌で感じた。

もっとたくさんいろんな話を聞きたかったが、私たちに残された時間はなく、後ろ髪を引かれる思いで、「大阪ボランティア協会」と「おおさか行動する障害者応援センター」を後にした。今からいよいよ本番（社協職員のつどい）が始まるのに気持ちは、たっぷり一日研修をしたような感じで私たちはタクシーに乗り込んだ。

最後にご多忙な中、時間をさいていただきいろいろと教えて下さった「応援センター」の中村さんと「大阪V協会」の福満さんに感謝したい。

「ありがとう」

いま、地域は

県内各ブロックでの活動をのぞき見するこのコーナー。
今回は福岡地区地域福祉活動職員連絡会の研修会の模様をレポートします。

「都城市社協の小地域活動に学ぶ」

玄海町社協　牧　雅仁

福岡地区地域福祉活動職員連絡会は、筑紫・糸島・粕屋・宗像地区の二〇社協、会員数四十二名で構成されています。県連絡会の中のイメージとしては比較的おとなしいブロックですが、団結力は他のブロックに負けないものを持っていますし、地域では持ち前の個性を生かしながら日々仕事に取り組んでいます。また、最近では福岡地区連絡会の枠を離れて、若手職員同志の勉強会や飲み会、近隣地区対抗ソフトボール大会など自主的な活動も行われております。

小地域福祉活動に学ぶ

さて、福岡地区では毎年テーマを決めて自主研修会を行っていますが、平成七年度から八年度にかけて「小地域福祉活動に学ぶ」をテーマに県内外三社協で勉強させていただきました。今回は、南国宮崎の都城市社協にお邪魔させていただき、おいしいお茶と焼酎、そして霧島山の豊かな自然にも触れた二日間でした。

都城市は、宮崎県の南西部、都城盆地のほぼ中央に位置し、鹿児島県に隣接した人口十三万四千人を擁する街です。

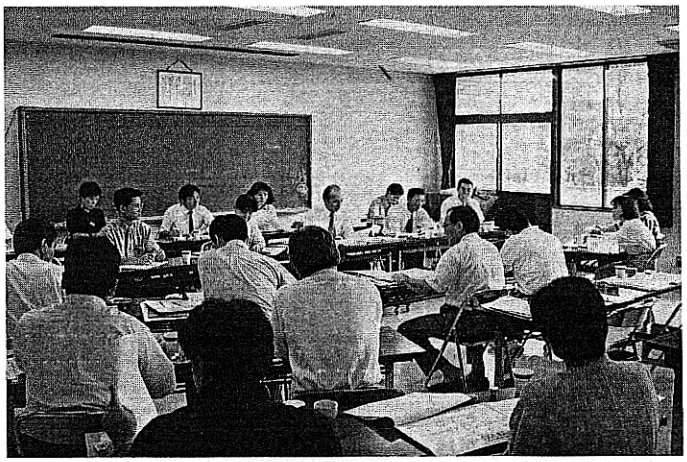
都城市社協は、総合社会福祉センターに事務局があり、研修はその二階会議室を使わせていただきました。当初二、三人の職員の方が担当されると思っておりましたが、雛段に並ぶがごとく事務局長さんをはじめ、次長、地域福祉活動コーディネーター、専門員、ヘルパー……。そして、なんと宮崎県社協の地域福祉課長を含め総勢十一名の方々が正面に揃われ、代表して挨拶しなければならない私の体は一瞬硬直しましたが、都城市社協の研修に対する意気込みを感じました。

研修は、都城市社協の専門員の進行で各担当ごとの事業説明がありました。内容は後で記述させていただきますが、とにかく皆さんの早口には驚かされ、メモを取る手が疲れたことを覚えています。午後一時三十分から始まった研修も三時間半という時間も忘れさせるほど熱心なものでした。なお、研修内容を、次の三つにまとめさせていただきました。

一、小地域ネットワーク活動

都城市のネットワーク活動の特徴は、その地域の特性を重視して展開されていることです。現在、十一中学校区、百六十七自治公民館で「住民福祉講座」、「見守り活動」、「ミニデイサービス事業」という三本柱を社協から提示し、地域での取り組みがなされています。

「住民福祉講座」は、自治公民館を拠点に展開され、介護教室や福祉ビデオの上映会、福祉サービスについての説明などが行われ、座談会により、隠れたニーズの掘り起こしに努めています。その中から高齢者などの要援護者に対する「見守り活動」につながっていきます。この活動は、近隣者で見守りチームを組織し、安否確認は勿論、家事や買物の手伝い、民生委員や家族への連絡などを行っています。



「ミニデイサービス事業」は、全社協が勧めている〝いきいきサロン事業〟と同じようなもので、地域の高齢者が歩いて行ける公民館等で茶話会や健康講座を行うことにより、楽しい仲間づくりを通して精神的な張り合い、生活意欲の向上を目的として各公民館ごとに色々な工夫がなされています。

また、このネットワーク活動の啓発として年七回の情報誌発行と活動のリーフレット作成、ビデオ『こんにちは、お元気じゃひか?』の製作なども行っており、地域での座談会に役立っているようです。活動の問題点として、公民館活動の連携もありますが、現在一六七自治公民館でのネットワークの徹底が困難であり、行政を含めて定期的な協議がなされています。しかし、行政の理解が得られず補助金等を受けていないのが現状です。また、障害者へのネットワーク活動についても現在検討中ということです。

二、総合相談事業

平成五年度に『ふれあいのまちづくり事業』を受け、最も力を入れた事業です。常設相談は月曜から金曜まで、専門相談は月一回、地区に出向いての移動相談なども

行われています。相談件数は、一か月約一一〇件で、一番多い相談は離婚相談です。

また、「高齢者に力を入れ過ぎじゃないか。子育て、不登校の問題などもたくさんあるのに。」との声に対し、家庭児童相談事業も開設し、現在は精神障害相談も受けるようになり、子どもから高齢者まであらゆる相談に応じるための総合相談事業を展開しています。

三、都城市福祉施設等連絡会

平成五年度より各社会福祉施設と福祉事務所、訪問看護ステーションなど福祉専門機関との協働事業を行うために連絡会が組織されています。この連絡会では、他の福祉関係機関相互理解と総合的な知識・情報を得ることによって、都城市の地域福祉を推進していく原動力になっているようです。

以上、研修内容を要約したものです。

研修会終了後、宿泊先厚生年金センターで都城市社協と県社協から六人が懇談会に参加され、研修中では聞けない、話せない話に花がさき、焼酎を酌み交わす手は、夜が更けても休むことはありませんでした。

終了後、いつものように福岡ブロックの数名が、「せっかくやけん都城のラーメンが食べたかー！」との声を快く受けていただき、都城の方々と夜な夜な街へ繰り出した次第です。車に揺られて着くには着いたのですが、何とそこは「とんこつ味の博多ラーメン屋」……。ちょっと複雑な心境でした。

この研修会をとおして感じたことは、職員の方々は勤めて四、五年の若いスタッフが多かったのですが、自分たちも学ぶところがあれば吸収しようとする意気込みと積極的な姿勢が感じられ、とても元気な社協マンのみなさんに会うことができ、私など、原点に返ることを再確認しました。

また、昨年数名の方が退職されたとのこと。行政からの人件費補助率が八〇％と、やはり身分保障を確立しなければ人材確保、育成は困難であることを実感することとなりました。

ちなみに……

翌日の研修は、鹿児島県福山町で、「黒酢のふるさと福山をたずねて」と題し、黒酢の製造について勉強（？）しました。酢工場なんか行きたくないと言っていた専門員も、帰りには数本土産を下げ、都城市社協のエキスと黒酢のビンの重さで頭と体に刺激を受けながら、南国宮崎、鹿児島をあとにしました。

なお、ここを見学地に選んだのは、G社協の強い要望で強行されたということを最後に付け加えておきます。

関西の自主研修会に学ぶ

私たち社協職員は、これからどう「社協」活動を展開していったらよいのでしょうか。常に考えていかなければなりません。その際、当然学習活動が重要になってきます。十二月十二日に私たち地職連の研修会に、関西社協コミュニティワーカー協会大阪研究部会の松永さんにきていただき、「関西の自主研修会」の活動方法等について課題提起をいただきました。

関西社協職員
コミュニティワーカー協会
大阪研究部会
運営委員　松永喜雄氏

《大阪府下における職員研修と職員連協の歴史》

◎職員連協の歴史

大阪府下の四三市町村で職員連絡協議会（以下、職員連協）を組織しており、その一つの事業として自主研修会が行われるようになりました。この職員連協は、一九六七年に事務局長も含めた組織として「専任職員親睦会」という名称で発足し、その後一九七四年に事務局長を会員の対象から除き「市町村社協職員連絡会」という名称等の変更を行い、今に至っています。また、この他にも会長を対象とした「会長会」、事務局長を対象とした「事務局長会」という組織があります。

一九八〇年から職員連協が主催で貸付けの部門だけでしたが、職員の「業務研究会」が発足し、勉強会が始まりました。その頃は業務時間中に大阪府社協に出向いていき、勉強会を行っていました。一九八二年には、ボランティア・地域関係業務・総務等それぞれの「業務研究会」が始まりました。毎月一回定例で行い、運営も職員自身が行っていました。

◎「自主研究会」発足の経緯

「業務研究会」発足当初、職員自身が様々な知識・情報を得たいという志で参加していました。しかし、次のようなことが問題となってきました。四つの研究会で行われていた勉強会の内容を、年間報告書にまとめて作成していたのですが、その中で事例を交えた報告書が市町村名入りで出されたのです。このことについて一部の事務局長からクレームが出て、それ以来、報告書作成にあたり、内容の確認が行われるようになりました。もう一つは、業務研究会の参加姿勢にルーズな職員が出てきたのです。そういったことから「業務研究会」の存在を問われることとなりました。しかし、この会が解散した本当の理由は、研究会の勉強内容がステップアップできない状況にあったからだと思います。当初から研究会に関わっていた参加者は今までとは違